アートミーツケア学会 News+Letter

Vol.11 2013 Summer

CONTENTS

2012年度愛媛大会「浴欲情場 YOKUYOKU JYOJYO♨」
松山愛果

あなたにとってのアートとケア…
工藤ひろ子、山崎竜二、弘田陽介、相澤久美、奥本京子

臨床こばなし　「体感を信じ、身体で考える」　三宅博子、中島香織

2013年度金沢大会のご案内　横川善正

インフォメーション　入会のご案内

Photo:道後"浴欲"ツアー　撮影:梶原剛

浴欲情場 YOKUYOKU JYOJYO
2012年度愛媛大会報告

愛媛大会は2013年5月に開院した「四国こどもとおとなの医療センター」の見学にはじまり、温泉の街ならではのおもてなしが堪能できる分科会、アートとヘルス、祈り、復興支援といった多様な取り組み、についての議論が交わされました。
聖徳太子も愛したという道後の街を舞台に分科会をつくり上げた学生の奮闘記から、「浴欲情場」を振り返ります。

レポート

分科会D学生企画「道後“浴欲”ツアーにようおいでたなもし」から学び得たもの

松山 愛果 愛媛大学大学院教育学研究科教科教育専攻保健体育専修

道後で、学生が、できること

「アートミーツケア学会が愛媛大学で開催される！これは何かのかたちで参加させてもらいたい！」その想いから、学生として愛媛大会実行委員に入り、学生ならではの企画をやってみないかと、嬉しい提案をしていただきました。アドバイザーとして心強いMICHIKUSA代表の梶原剛さんと一緒に、まずは仲間探しから始まりました。いの一番に同じ院生で社会科教育専修の佐々木杏菜さんに声をかけました。快諾してくれた佐々木さんには、今でも心から感謝しています。「学生…愛媛…アート…ケア…」私たちに何ができるだろうと、まったくゼロの状態から企画を考えました。コンセプトは「自分も参加したくなる企画・自分が楽しめる企画」とし、学生が案内を務める道後のツアーにしようと決定しました。県外から訪れた方を対象に、愛媛と言えば道後、道後と言えば温泉、湯の町道後で、心と身体を癒してほしいと考えました。

それから具体的に何をどうするか、企画の構想を練る日々が始まりました。アドバイザーの梶原さんから、2012年10月6日から12月2日まで大分県別府市で行われている、別府現代芸術フェスティバル2012「混浴温泉世界」に行ってみようと提案され、フィールドワークをすることになりました。これは「湯のまち別府ならではのアートフェスティバル」と題されて、まさに私たちが道後でやりたいことでした。商店街や古い空き家、元ストリップ劇場など、別府市に元々ある空間のなかに、国内外のアーティストによる、アート作品が別府のまちと融合していました。梶原さんの行動力のおかげで、「混浴温泉世界」総合プロデューサーの山出淳也氏からお話を聴く機会もあり、「混浴温泉世界」の表裏を視察することができました。同じ感動を共有した仲間たちと多くの刺激を受け、道後ツアーへのやる気エネルギーを満々にして愛媛に帰ってきました。

そして私たちは道後で何ができるか、道後ならでは学生ならではのカラーを出すために、まず何をすべきか悩みました。私は4年以上松山に住んでいて、道後のことを何も知らないことに気付きました。それでは道後のまちを県外の方に紹介できるはずがないと思い、それからは佐々木さんと何度も道後に足を運びました。実際に見て触れて食べて感じて、観光客に話しかけたりもしました。

そして、ここを見てもらいたい、これは外せないというような、私たちの道後へのこだわりが少しずつ現れてきました。道後商店街振興組合理事の石丸明義さんにもお話を伺い、このツアーを通して最終的には道後の活性化に繋がるような、資料が得られたら良いと思い、ツアー後に参加者から感想のお便りが届くような仕掛けを作りました。これは佐々木さんのアイデアで、参加者にかたちとしても記念に残るような、愛の詰まったお便りになりました。そしてツアー参加者にも、自然とアートに参加してもらおうと、鈴のついた杖を持ってもらうことにしました。一本一本手作りで、参加者にもとても喜ばれました。

町全体が非日常世界に

本番当日は、異空間を演出するために、案内人である私はマドンナの格好をして、道後温泉本館でパフォーマンスをするダンサーたちも坊っちゃんに扮しました。当日に参加者も増え、別府の「混浴温泉世界」のプロジェクトにも関わった方2名も参加してくださったのが、とても嬉しく思いました。参加者は17名で天候にも恵まれ、道後ツアー日和となりました。参加者が鈴の杖を持って、市内電車に乗っている光景がとても印象的で、非日常世界が広がっていました。道後商店街では解説も含め、パフォーマーたちの独特の世界観から、ツアー参加者以外の観光客も一緒に立ち止まって見入っていました。道後の町全体を巻き込みながら、多くの方の協力で計画通りの進行もでき、参加者からもとても嬉しい感想をいただいたりして、大成功だったのではないかと思います。

今回道後ツアーを企画し、気付いたこと得たことが数えきれないほど多くあります。結果成功したことも良かったのですが、私にとってこの企画を作る上でのプロセスが、もっとも色濃く残っていて重要なことでした。まずは梶原さん、佐々木さんをはじめとする企画を支えてくれた仲間たちに、心から感謝しています。この2人とは今でもフィードバックしてこの企画について話しています。パフォーマーたちとも感想を言い合い、もうこのような機会はないかもしれないけれど、課題点をあげたりする時間も設けることができました。この企画を通して、人と向き合うこと一つの目的に対して、突き詰めて議論することを訓練したように思います。

最後に、道後ツアーに参加してくださった方々、本当にありがとうございました。「道後が好きになりました。」という言葉をいただけたとき、「私も大好きです。」と思ったのと同時に、またいつか道後でお会いできればと強く思います。ありがとうございました。

アートミーツケア学会2012年度総会・大会「浴欲情場 YOKUYOKU JYOJYO ♨」

■日程　2012年12月14日（金）、15日（土）、16日（日）
■会場　愛媛大学　城北キャンパス
■主催　2012年度愛媛大会実行委員会、アートミーツケア学会
■協力　愛媛大学
■プログラム

見学先の香川小児病院での取り組みは大会中、愛媛大学ミュージアムで展示されました。

[12月14日（金）]
□ホスピタルアート・スタディツアー

[12月15日（土）]
□講演「祈りからはじめる<結縁（けちえん）>のデザイン」
秋田光彦（浄土宗大蓮寺住職・應典院代表）

□講演「アートによる復興支援～宮城県南三陸町の現場より～」
吉川由美（ENVISI代表、DAHA　Planning Work代表取締役
八戸ポータルミュージアム「はっち」文化創造ディレクター）

□対談　秋田光彦×吉川由美
［聞き手］本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター准教授）

□クロストーク「アート＆ヘルスの現在」
［話題提供］西田朗（東京都立小児総合医療センター院長）
森合音（香川小児病院ホスピタルアートディレクター）
［コメンテーター］坂倉杏介（慶応義塾大学グローバルセキュリティ研究所教養研究センター特任講師）
李永淑（帝京大学医療共通教育センター非常勤講師）
［進行］森口ゆたか（美術家、NPO法人アーツプロジェクト代表）
山口悦子（大阪市立大学医学部付属病院・医療安全管理部・専任医師）

[12月16日（日）]
□プレゼンテーション
□「香川小児病院～四国こどもとおとなの医療センターにおけるクスの木成長の物語」
□分科会

A 体熱の実感―自己や他を身体を通して感じて知る	B 『浴場』『欲情』としての場―癒し・祈りをもとめ―
C アートとケアの現場から教育を問い直す	D 道後“浴欲”ツアーにようおでたもなし

□企画展
「アートとケアを考える」［場所］愛媛大学ミュージアム

「あなたにとってのアートとケア・・・」
インタビュー&DVDのご案内

アートミーツケア学会は実践者や研究者、さまざまな背景を持った会員によって構成されています。しかしひとつの学会に所属していても隣は何をする人ぞ――お互いの活動を知らないという声をたびたび耳にします。そこで会員や愛媛の方にインタビューを行い、愛媛大会の企画展「アートとケアを考える」で美術家 森口ゆたかさんがインスタレーションとして展示しました。今回はＤＶＤ化にあたって、５名の会員のインタビューを抜粋してお届けします。

いつもケアされている人が、外部の人がくると気遣ってくれる、そこがいいでしょ

工藤 ひろ子 NPO法人ARDA事務局長

ARDAでアートデリバリーという活動をはじめ、もう10年になります。アーティストと一緒に、高齢者の施設や保育園、児童館、障害をもっている子どもたちのための施設等へ出かけていって、アートワークショップを行う活動です。特徴は、二段階でやるところですね。たとえば高齢者施設の場合は、介護士さんと、それから介護されている高齢者の方と、二回セットでやる。「介護する人、される人のためのアートデリバリー」と名づけています。介護士さんが一回経験しておくと、もう一回高齢者の方とやるときに、自分がやったときの心の開かれていく感覚、うまくいかなかったときの気持ちが生きるんです。アートデリバリーでは、アーティストがいることによって高齢者の方が、普段とは違う部分を見せる。だから、自分たち介護者も違う面を見せればいいじゃないって、ある方がおっしゃったんですよ。それが、私はとてもよかったと思ったんですよね。知らず知らずのうちに、いつもお世話している立場の人たちが、違う面を見せている。それで、おもしろいやつだなって言われちゃったとか。対等な関係ですよね。それはワークショップの力だと思います。気晴らしって、よくない言葉みたいだけど、すごく必要なことだから。アートは、その気晴らしの通路というか、閉塞しているところにしゅっと入って、道をつくるようなところがあると思うんです。

新しいメディアとしてのロボットがコミュニケーションにどのような影響を与えるのかを探っています

山崎 竜二 （株）国際電気通信基礎技術研究所 社会メディア総合研究所 石黒浩特別研究室研究員

自我論、つまり私とは何かという問いを考えていくときに、私というものが崩れていくステージについて考えてみたいと思いました。テーマ的には「主体性／主観性とは何か」ですね。その、私が崩れていく局面として、認知症がひとつのトピックになりました。介護のなかで現れる主体性というか、私あるいは私たちのありようというのを解き明かしていきたいと思ったんです。また、それを認知症ケアにおけるコミュニケーションとして、よりひろい人々との交流としてみたときに、世代間コミュニケーションということもトピックになり、一種の地域ケアにあたるようなことを考えてきました。

いまは、その地域ケアやコミュニケーションを、対面だけではなくて遠隔コミュニケーションに拡張できないか、したらどうなるかということに興味を持っています。そこでお年寄りにとって、コミュニケーションをとりやすいメディアとして、ロボットに注目しました。人と人との間に、新しいメディアとしてロボットが登場したときに、どのようなコミュニケーションが可能なのかということを探っています。そのひとつのツールとして、遠隔操作型アンドロイド、「テレノイド」を使い、このロボットが役立つところ、人のコミュニケーションの可能性をひろげるところを探そうとしています。

＊テレノイドは大阪大学とATR石黒浩特別研究室により共同開発されたものです。

DVD「あなたにとってのアートとケア・・・」

■内容　関東や関西を拠点に活動する会員のみなさん、愛媛のみなさん27人のインタビューを収録しています。（約120分）

■頒布価格　学会員1,000円／未学会員1,500円

■発行　アートミーツケア学会

＊ご希望の方は事務局までお問い合わせください。

からだは人と人の間に存在するんです

弘田 陽介 大阪総合保育大学大学院専任講師

私は今、保育者を養成する学校にいます。「保育の仕事をしたい、子どもと関わりたい」という学生たちのなかには、結局自分と関わってほしいっていう、子どもの時の失われた時間を求めている面がある。でもそれは、悪いことではないんですね。自分は「なぜ保育という子どもと関わる仕事を選んだのか」、自覚して関わるということができていればそれでよいと思います。でもその「なぜ」ということを追求していくと、自分の「からだ」の中に織り込まれたものに突き当たる。

これは私の恩師の整体協会の野口裕之先生に教わったことですが、ものとしての体はここにあるけれど、そうではない「からだ」はお互いの人と人の間にある。その「からだ」は間にあって固くなったり和んだりする。アートと「からだ」ということを考えるなら、よくわからない間にある「からだ」を扱っていくアートを考えていったほうがいいと思う。いろんな人と関わっていくことで、間にあるいろんなものが混ざっていくわけですよね。混ざっていくのに、いいも悪いもないんですよ。「誰かとはいや」とか、「誰とはいい」とか言っても、もう混ざっている。好き嫌い言うのは、「からだ」ではなくて精神なんですよね。「からだ」は、生まれながらにもう混ざっていて、私たちは死ぬまでそれにのっていくしかない。それが「からだ」というものに関わっていく大変さであり、希望であると思います。

非日常を積み重ねる毎日を過ごしている

相澤 久美 建築家、編集者、プロデューサー

大きな非日常に襲われて、家を失ったり、家族を失ったりという困難な状態にある人と日々接していて、日常って非日常の積み重ねだなという気が常にしています。たとえば、今日、初対面の人に会うことで、ちょっとドキドキしたり困惑したり、ということを乗り越えていくわけですよね。事の大小の違いはあるけど、その非日常を積み重ねる日常を過ごしているという意味では、みな一緒なんですよね。被災地の人だけでなく、困難な思いをしている人もたくさんいる。ただ、ひとつ大きな違いとしてあるのは、日常といわれるもののなかで用いていた、表現の場というのが確実に失われていることですね。それは、アートのような表現だけではないと思います。お母さんが子どもに料理をすることだとか、お年寄りが家庭菜園でトマトを育てることとか、人って毎日何か表現をしながら生きている。自分がやりたいことを、かたちとか言葉にしている。東北の方々はその場を奪われているということには違いがない。だから、元来彼らが持っていたものとは違うとしても、なんらか、自分自身を表現する場の回復みたいなことを、対話をとおしてやっているのかな。

軍隊に対して平和隊も日々、訓練しないといけない

奥本 京子 大阪女学院大学教授

イギリスで平和学を学んでいたとき、安全保障、国際関係、外交論等の専門の方々が同じ学部にいました。たとえば、安全保障の先生の部屋には、戦闘機の写真とかが飾ってある。かたや平和学の先生の部屋にいくと、ガンジーさんの写真があったりする。いくら同じ言語で話をしていても、言葉が通じない感じっていうのを経験して、もっと、ヒューマニティーズや、芸術、文学という要素が、実は平和学には大事なんじゃないかなと思いました。そこから平和学と芸術や文学の間に横たわっているのが「紛争転換」だと考えたんです。紛争転換というのは、まさにクリエイティビティの問題なんです。どう、その問題を転換するか、どんなふうな面白いアイディアでひろげていくか。条件を広げたり、自由に考えることで、問題を転換していく、そこにイマジネーションやクリエイティビティの力があって、それは芸術の力と連関すると思うんです。

毎日一つひとつの問題にどう対応するか。この問題について、どうするかというのを、瞬間瞬間でトレーニングしていくことが大事だと思います。非暴力や対話は、複雑なものを包み込んでいかないといけないですから。

臨床こばなし その2

体感を信じ、身体で考える

臨床こばなしでは、通常の事例報告や現場レポートからはこぼれおちてしまうようなこと、しかし生きることやケアにとって本質的な事柄を含むような、小さな出来事や経験について、あれこれ語り合います。登場するふたりは大学院で同じ音楽療法の研究室に所属し、さまざまな障害のある人たちと即興音楽セッションをおこなってきた三宅博子（神戸大学研究員）と中島香織（たんぽぽの家スタッフ）です。

前回のはなし

ALD（副腎白質ジストロフィー）という難病を抱えるNくんは、医学的に外界からの刺激にたいして反応が無いとされています。感情が読み取りにくいNくんとのセッションで、わたしたちは彼との対話が成り立つのを体感していました。でも、よくよく考えてみるといったいどうやって対話をしていたのでしょう。彼と向かい合うときは、確かな体感と同時に、もしかしたら思い込みではないのか、というじんわりとした不安をいつも抱えていました。かと思えば一回のセッションでスコンと腑に落ちてしまうこともあります。そんな、小さな出来事を振り返る「臨床こばなし」その2、はじまります。その日Nくんは、顔の艶で音楽をしました。

肌の質感と音楽をする

三宅　こないだ久しぶりに行ったセッションはすごかったね。何がすごかったって口にすると当たり前のことみたいなんだけど、「Nくんの顔が艶々や！」ということを感じたんです。ああ生きているんだなあというか、生命感、生きている質感みたいなものが全身から発せられていたよね。

中島　セッションが終わって、かき氷を頬張りながら「Nくん、なんか艶々やった！」と大盛り上がりしたのでした。だいたいセッションをしたあとは、ちょっとしたトリップ感があって（笑）、お茶をしながら現実世界に戻っていくみたいなことが多いですよね。あの時は、もう無性にかき氷が食べたくて。

三宅　今までNくんと音楽をするときに注目していたのって、彼の瞬きとか鼻の穴の動き、あとは心拍計の機械音なんかが多かったんだよね。でもそれだけじゃなくって、肌の質感とも音楽できるっていうのをあの時つよく感じて。

湯気もNくんも発信している

中島　ちょっと話はそれるかもしれませんが、あるダンスのワークショップに参加したときに炊飯器の湯気と踊ったことがありました。うまく言いにくいけれど、Nくんとのセッションにも似たようなところがないですか？

三宅　うんうん、言っている感じはよくわかるんだけど…

中島　なんというのかな…一緒に音楽する、とか、一緒に踊る、というのをものすごく意識しなくても気がついたらもう出会ってしまっている、みたいな。身体が勝手に動いてしまうんですよね。話しながら感覚がよみがえってきましたが、ワークショップのあと、風に揺れている木を見るとどうしても身体が揺れてしまうことがありました。湯気や木も、わたしも、一緒に踊ろうなんて思ってもないんだけど、勝手に身体が動くんですよ。で、いつの間にか一緒に踊っている感じになっていくし、そんな場ができていく。一見何も発信していないように見えるものでも、すごい情報量を発信しつづけているんですよね。

湯気WSのようす

「こちらが頑張って働きかけている」と自分では思っていても、相手からの発信を受けて音楽させられたり、踊らされたりしている。湯気もNくんも、わたしたちに「何かをさせる」という点では一緒なのかな。

三宅　なるほど。Nくんは医学的には植物状態と言われているけれど、「ことば」みたいなものとは全く別の技法で、何かしらの発信はずーっとしているんだと思う。その、細胞レベルの意思とでも言えるようなものを受け取った側が信じられるかどうかで。

中島　ほんとうに、ずっと前からNくんは発信しつづけていたんでしょうね。わたしたちにもNくんと関わってきた数年間をかけて、何か変化があったのかもしれませんね。自分の体感を信じられるようになったというか。

三宅　意思を持っている人どうしのやりとりだけがコミュニケーションではないんだよね。もうヒトとモノの境界線を超えたところで、たがいの身体が感じているものを信じるということになってくるのかな。ことばではなく、身体レベルでの対話。だから、肌の質感とだって湯気とだって対話はできる。

中島　身体の耳を澄ませば、Nくんも湯気も雄弁だと。

ことばをつくる

中島　はじめの話に戻ると、身体的なレベルでは通じ合うものを実感していても、言語のレベルで認識できないと「思いこみかもしれない」という次元から抜け出せなかったんですよね。やっぱりわたしたちが言語の世界にどっぷり浸かっていて、自分の身体を信じきれていなかったのだとおもいます。言語とは異なるモードで生きているNくんとのやりとりにたいして言語で納得しようとしても、それじゃあうまくいかない。

三宅　でも、その場にいない人に体感や経験を伝えるとなると、やっぱりことばで表現しなくちゃいけない場合もあるよね。今やってるみたいに語り合いながら、新たにことばや概念を創っていくことが必要な気がする。

中島　Nくんが日々生きているということは、きっと毎日毎秒、ことばをつくりだしているということでもあるんですね。

感じたことを信じるというのは、なかなかに難しいものです。確かめる術がない場合は特にそうです。えいやっ！と覚悟を決めて信じて、行動する。何も音楽や表現行為にかぎったことではありません。日々の暮らしの中でも、身体が感じていることをもっと頼りにして耳を澄ませそうと思います。なんだか締めの言葉のようですが、このコーナーは次回も続きます！（中島）

三宅 博子（みやけ・ひろこ）／障害を持つ人たちとの音楽療法の実践・研究やコミュニティの音楽活動に携わっています。最近担当になった少年とのセッションで、音楽の“表情”の豊かさを再発見しているところです。

中島 香織（なかじま・かおり）／たんぽぽの家に来て１年が経ちました。身を置く環境が変われば自分の身体もまた変わるのだなあと、しみじみ思っています。９月には障害をもった人たちとの音楽活動でロンドンへ行きます。

アートミーツケア学会 2013 年度 金沢大会にむけて
「ホスピタリティからうまれるアート」
――「美大」が「病院」と出会ってから――

横川 善正　金沢大会実行委員長（金沢美術工芸大学教授）

アートミーツケア学会 2013 年度大会は 11 月に金沢で行います。ご存知のとおり、金沢は金沢 21 世紀美術館に金沢美術工芸大学、はたまた近江町市場や百万石の城下町、心も体も満たされる街です。
また、美大と病院の協働による「ホスピタリティアート」によって医療とアートの越境が軽やかにはじまっている街でもあります。大会当日はホスピタリティとアートをテーマとした議論の場をもうけますので奮ってご参加ください。

2006 年の 3 月に誕生した AMC 学会は、今年で 8 年目を迎えます。以来、「アートとケアの出会い」が、私たちの身の回りのあらゆる場面において、想像を超える広がりと多様性をもって起りつつあることを実感する毎日です。実際、一見して芸術とまったく関連のないと思われていたようなところで、従来のアートの再定義を迫るような、新しい「アート」が生まれています。

本学会では、それぞれが立ち会った「アートとケアの出会い」を紹介し、それについての熱い議論がなされてきましたが、これからはその具体的な可能性について、とりわけ医療福祉の分野から切実に問われてくるように思われます。

金沢大会では、「もてなし」の対象を「ホスピタル」に限定せずに「ホスピタリティ」としています。同時に、これをもうすこし踏み込んで、アートの現場で医療者や患者さんの声を直接あるいは間接的に反映してみることで、とかく両者のあいだに引かれてきた暗黙の境界線を揺らせてみようということになりました。

ケアの現場が期待する、芸術のもつ潜在力とは一体どのようなものでしょうか。過去 5 年間にわたり、金沢美術工芸大学と金沢市立病院とが協働連携しておこなった事業に、「ホスピタリティアート・プロジェクト」（HAP）がありますが、この活動は医療とアートの接近に期待を寄せる医療者の側からの呼びかけで始まったものです。金沢美大の方では、病院のフロアや病室を工房やギャラリーとみなすことで、通常とは異なった「ものづくり」体験ばかりでなく、創作やコミュニケーションの根源的なものに触れる機会を得ることになりました。しかし、そのなかで見えて来た課題はどれも、お互いが「外から」見るだけでは容易に乗り越えることのできない、心理的、制度的、社会的な壁で隔てられているように思われます。

自分と他者とのつながりに気付いたとき、相手が求めることにたいして自分ができることのぎりぎりの選択に立ち会い、惑うこと、それは大袈裟ではなく「いのちのやりとり」と呼べる創造的な一瞬ではないかと思います。

より多くの参加者からの発表と提言をいただき、今後の学会活動のより大きなモーメントに結びつけてゆきたいと考えます。そのために、もてなしのまち金沢ならではの「ホスピタリティ」を味わっていただけるよう準備をすすめております。

アートミーツケア学会　入会のご案内

会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くのみなさまに賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

事業案内

1. 大会の開催
講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年１回大会を開催します。

2. 調査研究の推進
「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

3. 学会誌の発行
アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

4. ニュースレターの発行
日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

5. フォーラム、シンポジウムの開催
特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

6. プログラムの開発、プロジェクトの実施
ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

7. 国際交流の推進
アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。
入金先　アートミーツケア学会
口座番号　00920-4-252135

2. ご住所、電話番号、お名前、会員を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。

3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

会員種類・年会費

□個人会員　一般 10,000 円　学生 5,000 円
□賛助会員　30,000 円

役　員（敬称略）

□会長	鷲田清一	（大谷大学教授）
□副会長	中川　真	（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
副会長	森口ゆたか	（美術家、NPO 法人アーツプロジェクト代表）
□常務理事	播磨靖夫	（財団法人たんぽぽの家理事長）
□理事	秋田光彦	（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
理事	坂倉杏介	（慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所特任講師）
理事	志賀玲子	（舞台芸術プロデューサー、ALS-D プロジェクト）
理事	杉林英彦	（愛知教育大学講師）
理事	鈴木理恵子	（女子美術大学准教授）
理事	関口怜子	（ハート＆アート空間ビーアイ代表）
理事	ダーリング・ブルース	（美術史家）
理事	高橋伸行	（アーティスト／やさしい美術プロジェクトディレクター）
理事	銅金裕司	（メディアアーティスト、京都造形芸術大学教授）
理事	並河恵美子	（NPO 法人芸術資源開発機構代表）
理事	野津　亮	（大阪府立大学大学院工学研究科准教授）
理事	畑　祥雄	（関西学院大学教授）
理事	日野陽子	（京都教育大学准教授）
理事	本間直樹	（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター／文学研究科准教授）
理事	的場政樹	（医療法人直志会袋田病院院長）
理事	水野哲雄	（京都造形芸術大学子ども芸術学科教授）
理事	見寺貞子	（神戸芸術工科大学教授）
理事	三輪敬之	（早稲田大学創造理工学部教授）
理事	山口悦子	（大阪市立大学医学部附属病院安全管理対策室専任医師）
理事	横川善正	（金沢美術工芸大学教授）
□監事	太田好泰	（エイブル・アート・ジャパン事務局長）
監事	柊　伸江	（みっくすさいだー代表、京都聖母女学院短期大学非常勤講師）

アートミーツケア学会 2013 年総会・大会

■日程：2013 年 11 月 16 日（土）、17 日（日）
■会場：金沢美術工芸大学
（石川県金沢市小立野 5 丁目 11 － 1）
■テーマ：ホスピタリティとアート

プログラムの詳細やプレゼンテーションの応募方法は決まり次第、学会ＨＰにてご案内します。

＊お申し込み・お問い合わせは、事務局までお願いします。

編集後記

●愛媛大会は地元のスタッフの方や元気な学生さんの力でパワフルな大会になりました。次の金沢大会、会員のみなさんがより一層交流を深めたり議論ができたりする場をつくる予定です。ぜひご参加ください。（中島香織）

●愛媛大学美術館での企画「あなたにとってのアートとケア・・・」のインタビューで、何人かの会員さんのところに伺わせていただきました。関心やまなざしを広げ、実践につなげている会員のみなさんのお話はとても興味深く、楽しい時間でした。（森下静香）

アートミーツケア学会 ニュースレター
Vol.11　2013 年 7 月 20 日発行
発行　アートミーツケア学会
http://popo.or.jp/artmeetscare/
〒 630-8044 奈良市六条西 3-25-4
財団法人たんぽぽの家内
Tel.0742-43-7055　Fax.0742-49-5501
E-mail.art-care@popo.or.jp